

住田正樹著

## 『子どもの仲間集団の研究』

九州大学出版会 1995年

野垣 義行 (横浜国立大学)

本書は、子どもの仲間集団についての実証的研究で、序章、I部(第1、2、3、4章)仲間集団の構造、II部(第5、6、7、8章)仲間集団の過程、III部(第9、10章)仲間集団の機能と活動、終章からなる全523頁の大著である。

子どもの社会化の機関として仲間集団が重要であることは誰れも疑わないのであるが、その実証的研究は極めて少ない。それは、子どもの仲間集団が自然発生的で、集団構成も流動的で、研究対象として把握することが困難だからである(p.445)。本書はそうした困難な課題に真正面から挑んだ研究成果で、子どもの仲間集団の研究を大きく前進させた。

極めて豊かな内容で簡単に紹介できるものではないが、次の3点について内容にふれながら感想を記してみたい。

その1つは研究方法に関することである。子どもの仲間集団を研究するのだから、仲間集団の存在を把握しそのメンバーシップの境界を確定しなければならない。ソシオメトリック・テストでは仲間集団の存在や境界を把握できないことを示し、著者は自然観察法で仲間集団の存在を把握し、面接法によってメンバーシップの境界を明らかにする(p.33)。

しかしこのことはそう簡単ではない。著者は仲間集団の存在を確認するため、観察地点を決め頻繁に出かけ、その内部に迫るため子どもたちとラポールを確立しようと努力する。犬を連れて近づいたり、話のきっかけをつくるためマンガやテレビ番組に配慮するなど工夫している(pp.213-19)。このように調査の過程での工夫を丁寧に記述していることが本書の大きな特徴で、研究結果を身近に感じさせるとともに、後に続く者にとって研究の手引、励ましになるものである。

子どもの仲間集団の相互作用過程を分析するため、著者はべールズのカテゴリー・システムを採用する。その考え方(課題領域と社会的情緒領域の分類)が、活動集団と交友集団に対応している(p.225)からで、集団の特徴を別出するに有効であった。

仲間集団の相互作用分析データ(抜粋)は資料として収録されているが、どの発言がどのカテゴリーに分類されたかは示されていない。状況との関係もありその分類は微妙なものもあると思われるが、一部でも例示してもらえばより分かりやすかったと思う。

その2つは、子どもの仲間集団を集団形成の契機に注目して活動集団と交友集団に類型化したことである。前者は特定の具体的な集団的遊戯活動を目的として、後者は仲間同志の相互交渉自体を目的として形成された集団である(p.447)。

著者は様々な方法を駆使して両集団の構造、過程を分析し、多くの差異を見出している。多くの発見があったが、極く一部を示すと次の如くである。活動集団における地位決定要因は、従来考えられていたような年齢ではなく、集団目的である集団的遊戯活動に関する技能である(p.148)。交友集団のコミュニケーション構造の中心に位置しているメンバーであって

も、集団内の地位が高いとは限らない(p.182)。活動集団の相互作用パターンは「課題領域」に集中しており(p.260)、児童期の子どもの仲間集団は表出的側面が優越しているという従来の見方は検討されなければならない(p.261)。実証的研究の醍醐味は新事実の発見であり、本書はそうした発見に満ちている。

その3は、仲間集団の社会化機能に関してである。子どもは仲間集団の中だけで生活しているのではないから、仲間集団の社会化効果を特定することはできない。そこで著者は、仲間集団の経験が乏しい場合に子どもはどのような方向に社会化されていくかを、登校拒否児と家庭内暴力児の事例を通して考察している。子どもは仲間とのコンフリクトを通じて自己決定能力と客観的思考能力を形成する(p.376)のであるが、登校拒否児や家庭内暴力児は、自己イメージの確認をさせてくれるものだけを選択するため、仲間は制限され、固定化してしまう(p.397)のである。

著者はこの社会化機能に関する資料が第二次資料であることを気にしている(p.511)が、既存の調査データを新しい視点から分析することは極めて重要なことだと思う。多くの調査が行われているが、そのデータがきちんと整理され活用できる仕組みを期待したい。

親世代の遊びと子世代の遊びと比較して遊び文化の個人化、単純化を見出している(p.436)。このことに象徴されるように、子どもの仲間集団の形成力は変質、弱体化しているのではないか。いじめが大きく問題になっているが、いじめは集団的現象であるから、その原因の発見と解消のために子どもの仲間集団のメカニズムの一層の解明が求められる。

学校週5日制の完全実施が日程に登ろうとする今日、子どもの学校外での生活、活動の重みは増大する。子どものたくましい成長にどのような仲間関係と活動が必要かということは、本書のような実証的研究に裏づけられて構想されるものである。本書に刺激されて質の高い子どもの社会学的研究が産出されることを期待したい。

矢野智司著

## 『子どもという思想』

玉川大学出版会、1995年

山本清洋（鹿児島大学）

子どもと大人の世界の境が不明瞭になり可視的になったと言われるが、一方では、子どもの自殺や学校不登校の増加やファミコン現象等に代表されるように、大人に分かりづらい子どもの文化や生き方が生じている。結果として、子どもを育て教育する大人は、これらの子ども問題にスムーズに対応できないことへ深いジレンマを感じている。その原因を単純化すれば、一つは、大人が、子どもの住む世界や子どもが描く生活世界の異質性を認識できるテキストを持ち得ていないことであろうし、他の一つは、子どもを育てるといふことの思想が脆弱になっていることであろう。

本書は、これらの子ども問題に2つの重要な意味をもっている。第一には、著者が主張す